

『イエスとは何者か？』

'21/03/21

聖書箇所: マルコの福音書 8章 27-33 節 (新約 p.81-)

マルコは、この福音書の 1:1 で、「イエス・キリストこそが、福音そのものである！」というような証言をしてくれています。だから、マルコは、イエス様の送られた生涯やイエス様が語ってくださった教え…、また、イエス様がなされた様々な奇蹟などについて、事細かに記してくれたわけです。このイエス・キリストというお方を正しく知らずして、聖書が教えてくれている福音のメッセージを正しく理解することはできません。つまり、救いに預かることもできません。そういったようなアプローチは、いよいよ、マルコ 8-9 章の辺りから、本題に入っていきます…。

ここしばらく…、私たちは、イエス様が起こされた奇蹟について、幾つか学んできました。あの 5000 人の給食、ガリラヤ湖の水の上を歩かれる…、カナンの娘が死にかかっていたのを助けられる…、そして、先週は3つの奇蹟を見ました。…しかし、当時の群衆たちが理解できていたイエス・キリスト像…、つまり、当時の群衆がイエス様に対して持っていたイメージと、実際に、イエス様が教え…、イエス様が私たちに伝えようとしていた正しいイメージとは“大きなギャップ(=大きな開き)”がありました。…実は、そういったことが、今日のみことばでも明らかになっています。

命題: 果たして、イエス・キリストとは、一体何者なのか？

どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 8:27-33 をお開きください。今日は、そこから、果たして、イエス・キリストとは、一体何者なのか？というテーマでもって、みことばを学んでいきたいと思えます。そうすることによって、願わくは、今日私たちはイエス・キリストに対して、正しい理解を持つことができ…、イエス様が与えようとしてくださった救いを自分のものとするだけでなく…、ますます、この救いのメッセージを、多くの方々に“正しく”伝えていけるようになっていけることを願います。

I・当時の者たちが話していた 噂 ! (27-28 節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの内、27-28 節に注目していきましょう。そこには、**イエス様について、当時の者たちが話していた“噂”**について記されています。そこには、こうあります。

27 それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」

28 彼らは答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。」

●当時の者たちが気づいていた 事柄

まずは、今読んだみことばから、この当時の者たちが気づいていた“事柄”について、確認していきましょう。…この時、イエス様とその弟子たちは、『ピリポ・カイザリヤ』地方へと出かけられました。『ピリポ・カイザリヤ』とは、ちょうど今、前の画面にも映してもらっていますが…、新約聖書に何度も出てくる「カイザリヤ」の町とは違って(実際には、もう少し南側)…、ガリラヤ湖から北へ 50km 程行ったところにあります。この町は、「ピリポのカイザリヤ」という意味で、新約聖書に出てくる、大きなエピソードと言えば、ほぼ、今日の出来事くらいかな？と思われそうです。

さて、今日のみことばは、ピリポ・カイザリヤの近くを巡っておられる時に、起こった出来事について記されています。その時、イエス様は、弟子たちに対して、こんな質問をされます、『人々はわたしをだれだと言っていますか？』って…。すると、弟子たちは、こう答えます、『バプテスマのヨハネだと言っています。エリ

ヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。』って…。このように、当時の群衆たちも、このイエス様というお方が、「只者ではない！何か特別なお方に違いない！」ということに十分分かっていたのです。

それは、そうでしょう。…と言いますのは、私たちも、このマルコ伝を、ここまで学んできて分かりますように、イエス様は、ここに至るまででも、たくさんの癒しや奇蹟を行なってきたからです。そういったことの多くを、この当時の群衆たちは、実際に彼らの目で見て、実際に、そういったことを経験してきたのです…。

どうぞ、できましたら、**マルコ 1:27 をご覧ください。そこには、こう記されています、『人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。』**⇒これは、イエス様が、ガリラヤ伝道の初期に、汚れた霊に取りつかれた人を見て、その悪霊を追い出した時に、群衆が発した言葉です。

また、マルコ 2 章では、中風の人が、4人の友人たち？に連れて来られて…、イエス様は、中風の者の罪を赦された後、彼の重い“麻痺”を一瞬の内に癒されました…。その時の出来事が、みことばには、こう記されています、『すると彼は起き上がり、すぐに床を取り上げて、みなが見ている前を出て行った。それでみなのがすっかり驚いて、「こういうことは、かつて見たことがない」と言って神をあがめた。』(マルコ 2:12) って…。⇒皆さん！中風で、恐らくは、全身麻痺のような症状を抱えていた者が、一瞬の内に起き上って、スタスタ歩いていくなんで、見たり聞いたりされたことがあります？…まず、どこにも居ないはずです！…だから、この当ても、イエス様のなされたことを見て、「こんなこと、見たことが無い！」と言って、神をあがめたのです。

また、先週に私たちが学んだみことば…、そこでも、イエス様は、耳が聞こえない、口がきけないという、「ろう者」のことを癒してくださいました。…先週は時間が無かったので言えなかったのですが、聞こえなかった耳が聞こえるようになるというのは、何となく分かります。…しかし、口がきけないというのは、恐らく、このろう者は、中途失聴…、つまり、ある程度話していたのが、急に、病気やケガが理由で聞こえなくなったという“ではなくて”…、生まれつきか、あるいは、小さい頃に聞こえなくなったと思われそうです。果たして、そんな人物が、いきなり、耳が聞こえるようになったからといって、何の訓練もなく、突然話せるようになるものでしょうか！…でも、イエス様がなされた奇蹟…、神の奇蹟とは、そういったようなものなのです！

マルコ 7:36、『イエスは、このことをだれにも言ってはならない、と命じられたが、彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした。』⇒先週に学んだように、ここで、その奇蹟のことを言いふらしたのは、ろう者であった人物ではありません。…と言いますのも、この表現には、『彼らは…』という主語が使われてあることから、イエス様から口止めされたのも…、それを黙っていることができずに言いふらしたのも、当時の群衆たちであったことが分かります。…当時、イエス様のなされた、尋常ではない奇蹟を見た者たちは、その、あまりの不思議さの故に、黙っていることができなかったのです…。

●神の ご計画

このように、当時、イエス様のなされた奇蹟を見た者たちは、「この人物は、只者ではない！普通ではない！」ということに気づいていました。しかし、残念なことに、当時の群衆たちが気づいていたのは、そこまででありました…。

さて、今度は、神様が永遠の昔から決めておられた“ご計画”について考えていきましょう。…この時代、イエス様の奇蹟などを目の当たりにした者たちは、イエス様のことを、口々にこう言います、「あれは、バプテスマのヨハネだ！いや、エリヤだ！いいや、預言者のひとりには違いない！」って…。これは、どのようなのでしょ？

29 するとイエスは、彼らに尋ねられた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えてイエスに言った。「あなたは、キリストです。」
30 するとイエスは、自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。

●シモン・ペテロの 返答

先程のポイントで見たのは、弟子たちが答えた、当時の人たちがイエス様について話していた“噂”程度の軽い認識です。しかし、ここ2番目のポイントは、イエス様が直接選ばれ…、そのイエス様とほとんどの行動を共にして…、イエス様が起こされた奇蹟の多くを間近で見て、そのイエス様から直接学びを受けていた弟子たちの“返答”であります。

先程読んだように、この時、弟子たちは、こう答えました、『あなたは、キリストです』って…。この平行記事である、マタイ 16 章には、こう記されてあります、『16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」 17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。 18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。 19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつなぐられており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」 20 そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言うてはならない、と弟子たちを戒められた。』(マタイ 16:16-20)

⇒同じことが記されてある平行記事であるはずなのに、マタイ伝とマルコ伝とは、かなり印象が違ってきます。…でも、これこそが口裏合わせをしていない…、嘘偽りの無い証言なのです。ここで、弟子のシモン・ペテロは、イエス様のことを、「あなたこそは、生ける神の御子キリストです」と言って、まあまあ、正しい答えを返します。ここマタイ伝で、イエス様が教えてくださっているように、ペテロに、そのような理解を与えてくださったのは、天の父なる神様です。このように、私たちに、聖書的な理解や知識を与えてくださるのは、神様の御業なのです。だから、私たちは、人々が救われるように、まずは1番に、神様に祈る必要があるし…、神様のみことばを曲げることなく、真っ正直に伝えていくべきなのです。

さて、ここで、ペテロが答えた『キリスト』という表現は、ヘブル語の「油注がれた者」という言葉のギリシヤ語訳です。その昔、天の神様は、イスラエルの民たちを導くに当たって、様々な規則や取り決めを用いられました。例えば、イスラエルでは、王様や祭司、あるいは、預言者たちがその職に就く時、油を注がれました。実は、その油は、聖霊なる神様を象徴しておりました。

ま、そういったこともあって、聖書の中には時々、こういったようなシーンを見ることができます。例えば、1 サムエル記 16:13-14、『13 サムエルは油の角(つ)を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油をそそいだ。【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。 14 【主】の霊はサウルを離れ、【主】からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。』

⇒ここは、数多くある象徴的な個所の内、1ヶ所ですが、非常に有名な出来事です。この時、預言者サムエルは、初代のサウル王に代わって、まだ、王になるには幼かったはずのダビデに目を留めて、彼に油を注ぎます。その時以来、『主の霊』がダビデに下って…、その代わりと言っては何ですが、主の霊は、サウルから離れていったというのです…。

●イエス様の 警告

このように、当時、「キリスト」という称号は、「神様から遣わされる特別な人物」を意味しておりました。だから、ペテロの答えは全然間違ってたし、むしろ、彼は正しい…、模範的な回答をしたのです。

実は、このイエス様が生まれる 700 年も前、預言者イザヤは、こんなみことばを記してくれています、『荒野に呼ばれる者の声がする。「主の道を整えよ。荒地(あれち)で、私たちの神のために、大路(おおい)を平らにせよ。』(イザヤ 40:3) ⇒実は、このみことばは、新約聖書のマタイ伝 3:3 に引用されていて…、実は、バプテスマのヨハネこそが、そのイザヤ書で預言されていた、「救い主のための道を備えるべく、活躍する先駆者」であった！ということが教えられています。

実は、私たちも、少し前に、こんなみことばを学びました…。マルコ 6:14-16、『14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ」と言っていた。 15 別の人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者の中のひとりのような預言者だ」と言っていた。 16 しかし、ヘロデはうわさを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言っていた。』

⇒ここに記されてある通り、この当時、イエス様を見て、そのイエス様のことを、バプテスマのヨハネだ！そのヨハネの再来だ！あのヨハネが生き返ったのだ！という者たちがおりました。そのヨハネの首をはねた、あのヘロデ王(=ヘロデ・アンティパス)も、その内の1人でありました。

でも、それだけではありません。マラキ書 4 章には、こんな預言がなされてあります、『見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。』(マラキ 4:5)って…。ここでは、世の終わりとどうも、所謂、「主の日」について預言されてあります。その時になると、預言者エリヤが、この世に再びやって来る！と言うのです。皆さん、預言者エリヤをご存知でしょうか？…紀元前9世紀頃、北王国で活躍した、あの偉大な預言者のことです。実際、神は約束通り、そのような人物を遣わしてくださいました。それが、あのバプテスマのヨハネです。だから、マタイ伝 11 章には、こんな風に記されてあります、『12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。 13 ヨハネに至るまで、すべての預言者たちと律法とが預言をしたのです。 14 あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです。 15 耳のある者は聞きなさい。』(マタイ 11:12-15) ⇒皆さん、分かってくださいますか？実は、ここで言われているバプテスマのヨハネが、ここでは、来たるべきエリヤなのです！

どうぞ、今日のみことばの少し後、マルコ 9:13 をご覧ください。そこで、イエス様は、バプテスマのヨハネについて、こう証言しておられます、『しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。』って…。

このように、天の神様は、紀元前 7 世紀とか、9 世紀の頃から…、いえ、実は、もっと前から、約束の救い主に関して、いろんなことを約束してくださっていました。そういったことを、この当時から、イスラエルの人々は知っていたのです。だから、大勢の者たちが、イエス様のことを見て、「あれは、バプテスマのヨハネだ！いや、マラキ書で約束されてある預言者エリヤだ！」といったようなことを口々に“噂”していたのです。…しかし、何度も言いますように、当時の群衆たちの理解は、所詮、そういったような噂程度の理解でしか無かったのです…。

II・当時の弟子たちが持っていた 認識 (29-30 節)

どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻っていただきまして、今度は、マルコ伝 8 章の 29-30 節をご覧ください。そこには、その当時、イエス様の弟子たちが持っていた“認識”が、どの程度のものであったか？ということが記されてあります。そこには、こうあります。

…そうでしょ？…なのに、一体、どうして、イエス様は、今日のみことばの 30 節で、そういったことを誰にも言わないように、弟子たちに戒められたのでしょうか？

…と言いますのは、実は、この時点ではまだ、ペテロも、また、他の弟子たちも、イエス様の正体について、十分な理解を持っていなかったのです！確かに、イエス様こそが、来たるべきメシヤ、つまり、約束のキリストであるという理解は何も間違っておりません！しかし、この時の弟子たちは、まだ、そのキリストという人物がなすべき務め…、その働きについて、よく分かっていなかったのです。…だから、イエス様は、この時、弟子たちに、『**自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた…**』のです。

じゃあ、皆さん。この時に、弟子たちが「約束のキリスト」という人物に抱いていたイメージとは、どういったようなものだったと思われるか？…想像できますか？…どうか、皆さん、ここで、私たちの身代わりに、あの十字架にかかって、死んで、よみがえられたイエス様のことをイメージしないでください。…と言いますのは、そういったイメージは、私たちが、イエス様のなして下さったことを知っているからこそ、出てくるイメージであって、この当時、この時代の者たちは、誰一人、そういったことを想像できなかったからです。…そうでしょ？

多分、旧約聖書のみことばをよく知っている人なら、「油注がれた者」という言葉を聞いて、恐らくは、あのダビデ王様のような人物をイメージされると思います。…そうじゃありません？…あのイエス様が、この地上におられた時代、イスラエルは、ローマの属国でありました。言わば、ローマ帝国に支配されていたのです。…そんな時代に、天の神様が、「油注がれた者」を遣わしてください。

実は、この当時、多くの民たちは、そういった預言を聞いて、旧約時代のダビデのような…、カリスマ的リーダーをイメージしたのです！恐らくは、美少年で、巨人ゴリアテのような難敵に対しても、信仰をもって、石打ち1つで立ち向かって、勝利を収めてしまうような…、そのような偉大なリーダー！自分たちの国を、あの憎きローマから救い出して、そのローマさえ滅ぼしてしまうような…、そんなイメージを、この当時の者たちは、『キリスト』という言葉に抱いていたのです。…だから、イエス様は、この時、弟子たちに対して、『**自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた…**』のです。

Ⅲ・イエス様による、正しい **お答え** ! (31-33 節)

どうぞ、今後は、今日のみことばの 31-33 節をご覧ください。そこで、**イエス様は、キリストという言葉が持つべき正しいイメージ…、正しい“お答え”を教えてください。**そこには、こう記されてあります。

31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、

三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

32 しかも、はっきりとこの事がら話をされた。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。

33 しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

● **神の 目的**

今読んだみことばに記されてあったように、何と、ここで、イエス様が教えてください、「キリスト」という言葉が持つ正しいイメージは、驚くべきものでした。…と言いますのも、ここで、イエス様が教えてください、キリストに対するイメージは、当時の者たちが、キリストに対して期待していたようなものと、“正反対”のものだったからです！

しかし、今の時代の私たちからすると、ここ 31 節で、イエス様が教えてください、キリストに関するイメージは、何ら驚くようなものではないと言うか、私たちからすると、ごく当たり前のようなイメージです。…そうでしょ？…でも、それは、今の時代だからこそ言えることなのです。

ここで、イエス様は、神様が持っておられた“目的”について教えてください。どうぞ、もう1度、31 節をご覧ください。ここで、イエス様は、本来、「キリストは…」と言うべきところを、『**人の子は…**』という風に言い換えておられます。…と言いますのも、何度も言うように、この当時の者たちは、「キリスト」という言葉に対して、かなり違ったイメージを持ってしまっていたからです。

実は、ここで、イエス様が使われた『**人の子**』という言葉は、福音書では 80 回ほど使われています。…イエス様は、この『**人の子**』という言い方を好んで使われたとされています。この言葉は、例えば、旧約聖書のダニエル書 7:13-14 には、こうあります、『**13 私がまた、夜の幻を見ていますと、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。14 この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。』**

→この預言は、所謂、千年王国に関する預言です。その時、イエス様は、空中再臨の時、天に挙げられた多くのクリスチャンたちと一緒に、患難時代の後、もう1度、この地上へと戻ってこられます。その時のことが、ここで預言されてあるのですが…、イエス様は、ここで使われてある『**人の子**』という言い回しをよく使われたのです。

さて、そのイエス様が教えてください、イメージは、“必ず”多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられる、というものでした。どうぞ、これまた、私たちクリスチャンのイメージというか、私たちが持っているイメージを、できる限り、捨ててください。…この当時、長老や祭司長、また、律法学者たちと言えば、神に仕え…、神様のみことばに通じているはずの者たちでした。…そうでしょ？…なのに、イエス様は、そのような神に仕えているはずのリーダーたちから『**捨てられ、殺され(る)**』というのです。一体、誰が、そんなことをキリストに対して想像できたでしょうか？…でも、現実には、そうだったのです！

しかも、その後で、イエス様が教えてください、それは、『**三日の後によみがえらなければならない**』ということでした。実は、この言い回しを原語のギリシヤ語で観察してみると、英語で言う「must」(～しなければならない)という言葉があつて、恐らく、この言葉は、ここ 31 節の表現すべてにかかっていると思われる。つまり、苦しみを受けなければならない！捨てられなければならない！殺されなければならない！そして、よみがえらなければならない！という感じですね。…このように、イエス様には、必ず、実現しなければならない、「神様の御計画」というものがあつたのです。…と言いますのも、私たち人間が救われるための道を備え、完成させることができるのは、このイエス様を置いて、世界中のどこにも居ないからです。しかも、そのためには、イエス様が私たちの罪を負って、あの十字架上で裁かれて、そのいのちを捨てて下さることが必要だったのです。…そうでしょ？

しかし、そういったことを、初めて聞かされた弟子たちからすると、もう、訳が分からなかったと思います。…だから、ここ 31 節の最後には、『**…と、弟子たちに教え始められた**』とあるのです。…と言いますのも、これが最初で、これ以降、イエス様は、何度となく…、少なくとも、3回は、弟子たちに、ご自分が救いの道を備えるために、必要なことを教えてくださいました。まあ、そういったことは、これから、追々、マルコ伝を学びながら、その都度(②マルコ 9:30-32、③マルコ 10:32-34)、観察していきたいと思つています。

まあ、この時から、イエス様は、弟子たちに対して、明確に、ご自分のことを…、また、ご自分が、どのようにして救いの道を完成されるのかを、32 節前半にあるように、はっきりと示してくださいました。しかし、残念なことに、そういったことが、この時点での弟子たちには皆目理解できませんでした…。

●ペテロの 罪

最後に、今から、その弟子たちのリーダー的存在であった、シモン・ペテロが持っていた誤解と言うか、彼の“罪”について見ていきましょう。…どうぞ、ここ 32 節の後半部分に注目してみてください。ここで、イエスは、ご自分が救い主としての務めを全うするために、どうしても、必要なことについて教えてくださいながらも関わらず、ペテロは、それを聞いて、イエス様のことを、道端にお連れして、いさめたというのです。

ここで、『いさめ(た)』と訳されてあるギリシヤ語(ἐπιτιμῶ)は、「叱る、非難する、咎める、勧告する、戒める、懲戒する…」というようなイメージの言葉で、やはり、他者を注意 & 叱責するような時に使われる言葉です。…つまり、この時、ペテロは、師匠であり、神が遣わされた救い主であられるイエス様のことを道端に追いやって、「イエス様！ そんなことを言うてはなりません！」と言って、叱ったというわけなのです。実は、ペテロの年齢と言いますのは、イエス様と同じほどであったか、多分、年下…、ひょっとしたら、年上であったかも知れないと言われています。

しかし、年齢など、あまり重要ではありません。…と言いますのも、どうぞ、33 節に注目してください。ここで、イエス様は、ペテロを叱って、こう言われます、『下がれ。サタン！』って…。これは、かなりキツくありませんか？…だって、ペテロのことを、イエス様はサタン呼ばわりされたのですよ！…もちろん、これは、この瞬間、サタンの霊がペテロに乗り移ったとかいうことではありません。これは、今でいうところの、「バカ野郎！ 愚か者！」というような意味です。

しかし…、イエス様が、この時、ペテロのことを『サタン』呼ばわりされたのは、全く、サタンと関係が無かったわけではありません。…と言いますのも、33 節の後半で、イエス様が、『あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』と言って非難されたように、この時、ペテロの頭にあったのは、神様の最善なる御計画のことではなく、ただ単に、イエス様のことを思いやったようなアドバイスだったと思われる。恐らく、この時のペテロには、イエス様のおっしゃられた壮大な…、「全人類の救い」といったようなものではなく、イエス様の将来か…、あるいは、自分の地位や将来のことしか見えていなかったのです。

実は、先程見た 32 節の後半部分を原語のギリシヤ語で観察してみると、「いさめる」という言葉の前に、「支配する」(ἄρχω)という意味の動詞が使われてあって、恐らく、この時、ペテロは、例え、一時的ではあっても、イエス様のことを支配して、自分の言いなりにしようとしたと思われる。…だから、イエス様は、この時、ペテロのことをサタン呼ばわりして、彼の罪を叱られたのです。

<励ましの言葉>

さて…、この時、ペテロだけでなく、イエス様の弟子たちは皆、同じような理解を持っていました。だから、今日のみことばの 30 節でも、イエス様は、ペテロだけでなく…、弟子たち全員を戒められたのです。確かに、この時の弟子たちだけでなく…、私たち人間には、未来のことが分かりません。だから、ついつい、私たち人間は、自分の考えや自分の意見が一番正しいかのような錯覚をしてしまいます。しかし、私たち人間の最善よりも、神様の最善の方が良いに決まっています。私たち人間の計画よりも、愛と恵みに満ちた神様の御計画の方が素晴らしいに決まっています！…そうでしょ！

今日、私たちは、イエス様のされた質問を発端に、この当時の者たちが話していた“噂”程度の理解から、弟子たちの持っていた中途半端な理解と、そして、何より、イエス様が示してくださった、正しいメシヤ観と言うべきものを学んでまいりました。でも、どうか、皆さん！…私は、イエス様が示してくださったお答えまで、よく理解していると安易に思い込まないでください。…と言いますのも、この当時の長老や祭司長たち、あるいは、律法学者やパリサイ人たちもまた、そのように思い込んでしまっていたからです。

良いですか？…私たちを救いに導いてくれるものは、聖書の正しい理解でも、神学でも、教理でもありません。大切なのは、私たちのイエス様に対する信仰だけです。…もしも、皆さんが、この聖書が教える正しい信仰を持っておられたら、「はいはい、私はよく分かっています…」とは考えず、しっかりと、自分自身の信仰をよく吟味されるはずだし、イエス様が明らかにしてくださった、31 節の告白を簡単に聞き流すことができず、それが、如何に、大きな犠牲を含んでいるかを分かってくたさるはずですよ。

どうか、このイエス様のなしてくださった、その大きな犠牲に甘んじることなく、日々、イエス様に対する感謝と、自分が生かされている使命を覚えて、毎日の人生を歩んでいってくださいますように、お願いします。私たちの周りには、まだ、この福音のメッセージを知らず、今もまだ、永遠の滅びへと向かっている人たちが山ほどおられます。どうか、そういった方々に、この福音のメッセージを語っていくことができるよう、熱心に、神様に祈り続ける者であってください。

私たちクリスチャンが、1 番に重んじるのは、神様への全き信頼です。私たちの考えや、この世の常識ではありません。私たちクリスチャンは、この神様のみこころを 1 番に優先していこうとします。私たちには、そのような特権と責任があるのです。この時、サタンの誘惑に陥ったようなペテロですが、このペテロは、この後で、こう警告してくれています。I ペテロ 5:8、『身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。』→どうか、サタンの誘惑に陥ることなく、大胆に、神様に従い続けることができるよう、常に、神様を信頼する者であり続けてください。

それと、まだ、イエス様を信じておられない皆さん…。天の神様は、永遠の初めから、すべてのことを御計画して…、私たちの罪を赦し、私たちを罪とその束縛から解放するために、御自分のひとり子であられるイエス・キリストを、この地上へ遣われ、私たちの罪すべてを、その身に負わせて、あの十字架上で、罪の清算をしてくださいました…。これ以上の犠牲が他にありませんか！

今日のみことばに書かれていた、この時点で、イエス様の弟子たちは、イエス様の持っておられたご計画について、ほとんど、理解することができませんでした。…しかし、イエス様が預言通り、あの十字架にかかって、約束通り、3 日目によりみがえられたことによって、あの物分りの悪かった弟子たちにも、神様の御計画について…、福音の中身について、ようやく理解することができました。どうか、皆さんも、神様の前に心を頑なにするのではなく…、願わくは、1 日も早く、このイエス様を真の神、約束の救い主として信じ…、このお方に従う者となってください。そこにこそ、救いがあるのです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。